広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	謝霊運の「賞心」の受容と変容 ： 『文選』所収の作品を中心に
Author(s)	中木, 愛
Citation	中國中世文學研究 , 76 : 153 - 177
Issue Date	2023-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054532
Right	
Relation	

謝霊運の「賞心」の受容と変容
――『文選』所収の作品を中心に――

中木　愛

はじめに

前稿[1]では、従来解釈が定まっていない謝霊運の「賞心」の語について考察し、「山水をめでる心」ではなく、すべて「わが心を知る人、真の理解者、知音」の意味であること、それは伯牙と鍾子期の故事から生まれた「知音」（「賞音」）の語の系譜に位置づけられることを論じた。「賞心」の語は、永嘉左遷の際、都との隔絶を嘆く場面に初めて現れたあと、理想の交友像を表すことばとして謝霊運の文学に定着するのである。

一方、唐代の詩には、次のように明らかに「めでる心」の意で用いられた例が数多く見られる。

・康楽愛山水、賞心千載同（康楽は山水を愛す、賞心千載同じ）　劉長卿「題蕭郎中開元寺新構幽寂亭」（『全唐詩』巻一四九）

・花月方浩然、賞心何由歇（花月　方に浩然たり、賞心何に由りて歇きん）　韋応物「灃上与幼遐月夜登西岡玩花」（『全唐詩』巻一九二）

謝霊運において「真の理解者」を表していた「賞心」の語は、いかにして「めでる心」の意味へと変容していったのか。謝霊運のあと「賞心」の語を用いたのは、江淹、謝朓、沈約、虞羲、任昉、何遜であり、このうち江淹の二首、謝朓の一首、沈約の一首が『文選』に収められている。以下、可能な限り時系列に沿って考察し、受容の様相を明らかにしたい。

一　江淹

謝霊運のあと最初に「賞心」の語が認められるのは、おそらく江淹「雑体詩」であり、丁福林・楊勝朋『江文通集校注』は、建元四年（四八二）より前の作としている[2]。

「雑体詩」は、古詩から宋に至るまでの詩三十首を模擬したもので、高橋和巳氏が「詩の列伝」と述べる[3]ように文学史的な性格をもつ。模擬詩は通常、原詩への共鳴や尊敬など作者個人の感興を託すものだが、「雑体詩」は作品世界の再現に重点が置かれており、原詩との間に語彙面や思想面で懸隔があることも指摘されている[4]。江淹は、殷仲文と謝霊運を模した二首に「賞心」の語を用いた。

（一）「雑体詩」殷仲文

殷仲文は、老荘の哲理を説く玄言詩を山水詩の方向へ変革したと位置づけられる人物である[5]。詩はほとんど失われ、『文選』巻二二遊覧の部に「南州桓公九井作」が残るのみだが、江淹は「興矚」（興趣のままに眺めやる）というテーマを設定して、その世界を再現した。

江淹「雑体詩31」殷東陽「興矚」仲文[6]

1　晨遊任所萃　晨に遊びて萃る所に任すに
　　悠悠蘊真趣　悠悠として真趣を蘊む
3　雲天亦遼亮　雲天　亦た遼亮たり
　　時与賞心遇　時に賞心と遇う
5　青松挺秀萼　青松　秀萼挺んで
　　恵色出喬樹　恵色　喬樹出ず
7　極眺清波深　清波の深きを極め眺むれば
　　緬映石壁素　緬かに石壁の素きに映ず
9　瑩情無餘滓　情を瑩きて余滓無く
　　払衣釈塵務　衣を払いて塵務を釈く
11　求仁既自我　仁を求むるは既に我よりす
　　玄風豈外慕　玄風　豈に外に慕わんや
13　直置忘所宰　直置として宰る所を忘るれば
　　蕭散得遺慮。　蕭散として慮いを遺るるを得たり。

[李善注]謝霊運田南樹園詩曰、賞心不可忘。
[五臣注]（向曰）言雲天既高明、復与識我心者相遇。
[鈔]賞心、得意、賞、識也。言良時識我心而相会也。

「朝早く遊覧に出かけると山水は遥かに真の趣きをたくわえていた。天空も澄みわたって、折しも「賞心」と遭遇した」と詠い出し、鮮やかな青を突き出してそびえる松、白い岩肌に映える清らかな波を描いて、心の浄化と求道を詠う内容である。

第4句の「賞心と遇う」は、一見、人との出会いを言うようにも思われるが、この詩のテーマは「興矚」であり、殷仲文の「南州桓公九井作22」とは異なって君主や僚友は登場しない。史実を見ても、殷仲文は桓玄を見限って劉裕に帰順したあと東陽太守に左遷され、謀叛の疑いで処刑される。江淹は当然その境涯を念頭に置きながら、しかし個別の出来事には立ち入らず、山水の眺望による消憂と超脱を描き出した。第4句は、後続の句に描かれる松や波、すなわち俗塵にまみれた心を浄化してくれるような、清らかな山水との出会いをいうものであろう。とすると、江淹は「賞心」の語を、「心に賞するもの」の意で用いたことになり、謝霊運とは用法を異にする。

厳密には「心賞」というべき所を「賞心」と記したのである[7]。

そこには、「賞心」という謝霊運の造語をあえて用いることによって、謝霊運らしさを演出する創意が働いたのではないか。李善注が「賞心」の語の出処として、謝霊運の句（「田南樹園激流植援30」詩の「賞心不可忘」）を引くこともそれを示すが、この詩には全体を通して謝霊運の表現が取り込まれているのである。山水が真の趣きを含むという冒頭の言い回しも、結びで老荘の哲理を詠い上げた箇所も、謝霊運の次の句を彷彿とさせる。

・第2句「悠悠蘊真趣」
　→謝霊運「登江中孤嶼26」に「雲日相輝映、空水共澄鮮。表霊物莫賞、蘊真誰為伝」。
・第11句「玄風豈外慕」
　→謝霊運「道路憶山中26」に「得性非外求、自已為誰纂」。
・第12句「蕭散得遺慮」
　→謝霊運「従斤竹澗越嶺渓行22」に「観此遺物慮、一悟得所遣」。

そして第4句は、山水との邂逅をいう点で、謝霊運が永嘉での劇的な山水体験を描いた「如与心賞交（心賞と交わるが如し）」の句が想起されるべきであろう。

清旦索幽異　清旦に幽異を索め
放舟越坰郊　舟を放ちて坰郊を越ゆ
……
霊域久韜隠　霊域は久しく韜隠し
如与心賞交　心賞と交わるが如し
合歓不容言　歓びを合にして言を容れず
摘芳弄寒条。　芳を摘みて寒条を弄ぶ。

謝霊運「石室山」

清らかな朝に船出した謝霊運は、秘境の地に在る石室山の神妙な佇まいを目にし、その感動を「心に賞するものと交わったかのようだ」と詠った。それは、都を追われた絶望の中で、ようやく然るべき相手と交流できたかのような体験であり、謝霊運はこれを機に、山水に対して「賞」の字を用いるようになるのである。

では、なぜ江淹は、殷仲文を模した詩に、これほど謝霊運の表現を鏤めたのか。それは、殷仲文の詩が、山水詩人と称される謝霊運の要素を多分に孕むことを印象づけるためであろう。この「雑体詩」は、求道と心の解放を説く後半が玄言の要素を色濃く帯びるものの、松や波の美しさを細やかに描いた第5～8句は、短いながらも確かに山水詩の萌芽を思わせる。山水の本質と「賞」の意義を説く部分に謝霊運の表現を用いることによって――たとえ用法は異なっていても――この詩は「詩の列伝」と評されるとおり、見事に玄言詩から山水詩への橋渡しを象徴する作品となり得ているように思われる。

（二）「雑体詩」謝霊運

次に、謝霊運を模した詩を見てみよう。

江淹「雑体詩31」謝臨川「遊山」霊運
1　江海経遵迴　江海　遵迴を経
　　山嶠備盈缺　山嶠　盈欠を備う
3　霊境信淹留　霊境　信に淹留し
　　賞心非徒設　賞心　徒らに設くるに非ず
　　……
23　身名竟誰辯　身名は竟に誰か弁ぜん
　　図史終摩滅　図史も終に摩滅す
25　且汎桂水潮　且く桂水の潮に汎び
　　映月遊海澨　月に映じて海澨に遊ばん
27　摂生貴処順　摂生　順に処るを貴ぶ
　　将為智者説。　将に智者の為に説かんとす。

[李善注]賞心、已見上文。
[五臣注]（翰曰）言我賞心此山、謂懐仁者之意非空設而已。

「遊山」と題するとおり、ひと月あまり山水をめぐって霊妙な土地に留まるようすを描き、第4句で「賞心」はいたずらに設けるのではない」と詠う。つづいて、山の形状や水の透明感、朝映えの輝き、鍾乳洞や玉石、動物や花にいたるまで、謝霊運さながらの繊細な描写を連ねたあと[8]、名声ではなく自然に委ねる生き方を求め、それを智者に語ろうと結ぶ。

第4句の「賞心」は「設」の対象であり、「賞心を設く」、つまり「～する心を設ける」という語構造が明確に捉えられる。「設心」は、早くは『孟子』離婁下に「其設心以為不若是、是則罪之大者（其の心を設くるや、以為らく是の若くならずんば、是れ則ち罪の大なる者なり）」と見え、「徒設心」も、たとえば陶淵明「読山海経詩十三首」其十に、物の怪が積年の恨みを詮なく持ち続けることを「徒設在昔心（徒らに在昔の心を設く）」と言う例がある。

第4句は、「賞心」を設けること、すなわち山水を「賞」する心をもつことが、所在ない無益なものではなく、確かな目的もしくは効用を持つことを示したものだと言える。それは末二句に記されるように、自然の理に委ねて生を養うことであり、「摂生」「処順」「為智者説」といった表現も謝霊運に拠っている[9]。永嘉左遷以降の謝霊運は、「賞」の字を用いながら、山水の中に真理を見出して道を得ることを繰り返し詠った。「賞心非徒設」は、そうした作品から編み出された山水観であろう。山水への愛着を述べて叙景に徹する全体の流れからも、この「賞心」は「真の理解者」の意味ではあり得ない。

このように江淹は、殷仲文の詩では「心賞」すなわち「心に賞するもの」の意味で、謝霊運の詩では「（山水を）賞する心」の意味で「賞心」の語を用いた。もとの謝霊運と異なる上に、「雑体詩」の中でも用法が統一されてい

ないのである。このことは、江淹が、襲用の厳密さや措辞の統一性よりも、言葉が喚起するインパクトや詩全体が醸し出す趣きを優先させて「雑体詩」を作ったことを物語る。

鏡を鋳造するように、素材となる言葉を溶かしてから、「殷仲文の興矚」「謝霊運の遊山」といった鋳型に合うように流し込む。鋳造の過程では、素材の変形や変質は免れないが、これらの詩はそれぞれの作品世界を映し出す鏡として、確かに一定の完成度を誇っているように思われる。

二　謝朓

次に「賞心」の語が見えるのは、謝朓と沈約の詩であり、結論から述べると、二人とも謝霊運と同じ「真の理解者」の意味で用いたように思われる。二人は、竟陵王蕭子良が永明五年（四八七）に開いた西邸サロンの主要メンバー「竟陵の八友」であり、韻律美を追求した新たな詩風を開拓した。しかし、数年後に皇太子と武帝が没すると政局は混乱を極め、実権を握った蕭鸞が諸王を排斥して明帝として即位する。その前後に二人は地方へ転出しており、「賞心」の語は、まず謝朓が建武二年（四九五）に宣城に赴くときの詩に現れる。

なお、謝朓は、謝霊運の山水詩を大きく発展させたと評価され、とりわけ宣城赴任を謝霊運の永嘉左遷に重ね合わせ、山水の描写に精力を注いだとされる[10]。

謝朓「之宣城出新林浦向版橋27」

宣城に之かんとして新林浦を出で版橋に向かう

1　江路西南永　　江路　西南に永く
　　帰流東北騖　　帰流　東北に騖す
3　天際識帰舟　　天際に帰舟を識り
　　雲中辨江樹　　雲中に江樹を弁つ
5　旅思倦揺揺　　旅思　揺揺たるに倦み
　　孤遊昔已屢　　孤遊　昔より已に屢しばなり
7　既懽懐禄情　　既に懐禄の情を懽ばしめ
　　復協滄洲趣　　復た滄洲の趣に協う
9　囂塵自茲隔　　囂塵　茲より隔たり
　　賞心於此遇　　賞心　此に於いて遇わん
11　雖無玄豹姿　　玄豹の姿無しと雖も
　　終隠南山霧。　　終に南山の霧に隠れん。

［李善注］謝霊運遊南亭詩曰、賞心惟良知。
［五臣注］（向日）至此乃与塵游隔絶、而与心事遇会。

長江を遡る航程に都への未練を滲ませ、漂泊の孤独をかこちながら、第78句で「俸禄が得られるのも喜ばしく、隠棲の情趣にもかなう」と詠う。これは、謝霊運が永嘉左遷の途上で「久露干禄請、始果遠遊諾（久しく干禄の請めを露わすも、始めて遠遊の諾しを果たす）」（「富春渚26」）と詠ったのを踏まえ、官と隠の両立に慰めを得たものである。

つづく第910句では「ここから汚れた俗塵と隔たり、「賞心」と遭遇するだろう」と詠い、隠遁を宣言して結ばれる。「遇」字を用いて「賞心」との邂逅をいう表現は、先に見た江淹「雑体詩」の殷仲文の句「時与賞心遇」と類似し、ここも同じように「心に賞するもの」と解することが可能である。「心」と「賞」の語順を転じた理由は別に説明が必要だが、清らかな山水を想定すれば、上の句の「囂塵」との対も効く。五臣注が「心事」（心に思うこと）と説くのも、同方向の解釈であろう。

しかしながら、謝霊運と同じ「真の理解者」の意で解することも、また可能である。それには、李善注が引く謝霊運の詩「遊南亭」が注目される。

逝将候秋水　　逝くゆく将に秋水を候ち
息景偃旧崖　　景を息めて旧崖に偃さんとす
我志誰与亮　　我が志　誰か与に亮らかにせん
賞心惟良知。　　賞心　惟れ良く知らん。

謝霊運「遊南亭22」

この詩は、永嘉で移ろいゆく景物を前に、老病の身を憂えて帰隠を望む内容であり、「賞心」こそが我が思いを分かってくれると結んでいる。謝霊運は、この後も隠棲の場での悟りの境地の共有者、あるいは乱世における本音の交流ができる相手として「賞心」を求め、「賞心不可忘、妙善冀能同（賞心　忘るべからず、妙善　冀くは能く同にせんことを）」（「田南樹園激流植援30」）や「邂逅賞心人、与我傾懐抱（賞心の人に邂逅し、我と懐抱を傾く）」（「相逢行」第一章）と詠った。謝朓の「賞心於此遇」句は、こういった謝霊運の詩を踏まえて、隠棲を志向した宣城での知音との邂逅を期待したものとも考えられるのである。

ところで、謝霊運は、永嘉に向けて都を発つ際にも「賞心」の語を用いている。

従来漸二紀　　従来　漸く二紀
始得傍帰路　　始めて帰路に傍うを得たり
将窮山海迹　　将に山海の迹を窮めんとし
永絶賞心悟。　　永く賞心の悟を絶つ。

謝霊運「永初三年七月十六日之郡初発都26」

権力闘争に翻弄されて都を追われる失意を鬱々と綴ったあと、「今から山や海を歩き尽くそう、永遠に「賞心」との語らいを絶って」と詠い、都で親しく交わり語らった人物、おそらくは厚遇を賜った廬陵王劉義真やともに侍った顔延之らを「賞心」と呼んで、彼らとの別れを嘆くのである[11]。

つまり、政変後の地方転出という同じ状況に際して、謝霊運は都の「賞心」との隔絶を嘆き、謝朓は逆に任地での「賞心」との出会いに期待したことになる。これは両者の現実を反映していよう。謝霊運は、時の権力者徐

羨之らに疎まれての左遷とはいえ、出立の際には、劉義真や顔延之はまだ都にいた。劉義真が庶人に下され新安郡に遷されるのは約半年後、殺害されるのは一年後のことである。一方、謝朓の場合は完全に政局が切り替わっており、西邸を開いた蕭子良、仕えていた蕭子隆らはみな世を去り、華やかな文壇を共にした王融は早々にクーデターに失敗して獄死、沈約も前年に地方へ出ていた。

さらに、両詩は、隠遁の描き方にも違いがある。謝霊運が永嘉での生活を山水の跋渉に象徴させるのに対し、謝朓は玄豹の故事を用いて「玄豹のような美しい毛はないが、南山の霧の中に隠れたい」と詠う。南山に棲む玄豹は、毛の模様が傷つかないように、食を絶って霧雨の中に身を隠すという。つまり謝朓は、末二句に、保身のための隠遁であることを含ませているのである[12]。

二人の句を対照させると、謝朓にとって都は離れるべき危険な場所「囂塵」であり、そこに「賞心」は存在しなかったという事実が、輪郭をもって浮かび上がる。「賞心」は謝霊運の襲用であり、真の理解者の意味と考える方が、謝朓の思いがより深く読み取れるのではないか。

謝朓は宣城で、雨乞いの儀式のために敬亭山を訪れた。敬亭山を詠った詩は六首あり[13]、『文選』巻二七所収の「敬亭山詩」が有名だが、「遊山」の詩に「賞心」の語が使われている。

謝朓「遊山」　山に遊ぶ

1　託養因支離　養を託するは支離に因り
　　乗閑遂疲蹇　閑に乗じて疲蹇を遂ぐ
3　語黙良未尋　語黙は良に未だ尋ねず
　　得喪云誰辯　得喪は云に誰か弁ぜん
5　幸涖山水都　幸い山水の都に涖み
　　復値清冬緬　復た清冬の緬かなるに値う
　　……
19　触賞聊自観　賞に触れて聊か自ら観
　　即趣咸已展　趣に即きて咸な已に展ぶ
21　経目惜所遇　目を経て遇う所を惜しみ
　　前路欣方践　前路　方に践むを欣ぶ
23　無言蕙草歇　言う無かれ　蕙草歇きたりと
　　留垣芳可攀　垣に留まりて芳攀づべし
25　尚子時未帰　尚子　時に未だ帰らず
　　邴生思自免　邴生　自ら免れんことを思う
27　求志昔所欽　求志は昔より欽ぶ所
　　勝迹今能選　勝迹　今　能く選ぶ
29　**寄言賞心客**　言を寄す　賞心の客
　　得性良為善。　性を得るを良に善と為すと。

敬亭山の美しさに触発されて、隠棲へと傾く軌跡を詠った詩である。冒頭では出処進退の是非に疑問を呈し、麗しい土地への赴任を喜ぶ。以下、厳かな霊山の描写に紙幅を裂いたあと心の解放や胸の昂ぶりを詠い、宿願だった隠棲の道を選び取って、「賞心の客に言寄せる、性にかなうことこそ最善だ」と結んでいる。

この詩にも、謝霊運の影響が色濃く認められる。葛藤の末の隠遁を表す「勝迹」の語は、謝霊運が永嘉を隠遁の場と見なした句「戦勝臛者肥（戦勝ちて臛せし者も肥ゆ）」（「初去郡26」）に、本性を全うすることをいう「得性」は、故郷での隠棲を追憶した句「得性非外求（性を得るは外に求むるに非ず）」（「道路憶山中26」）に見え、第25 26句に挙げる二人の隠者も、永嘉から帰郷するとき自らを喩えた人物であった[14]。そして、「寄言～客」という伝言の言い回しも、次の句を意識すると思われる。

慮澹物自軽　慮い澹くして　物は自ら軽く
意愜理無違　意愜いて　理は違う無し
寄言摂生客　言を寄す　摂生の客
試用此道推。　試みに此の道を用て推せと。
謝霊運「石壁精舎還湖中作22」

山水の清らかな輝きに触れると、心安らかになって自然の理と一体の境地に至るという。そうした自身の体験を、寺の僧（「摂生客」）に勧奨する内容である。

謝朓「遊山」の「賞心の客」への伝言も、性にかなうかどうかを軸に据える生き方に、理解と共感を求めて発せられたものである。石碩「敬亭山の印象―謝朓から李白へ」[15]では、敬亭山を描いた一連の詩を考察し、謝朓にとっての敬亭山は、風光明媚で親しみやすい景勝地ではなく、祭祀を行う神聖な空間であり、隠逸への憧憬を喚起させる場であったと指摘する。そうした空間で呼びかける「賞心の客」は、単に遊覧を共にして景色を楽しむ仲間ではないだろう。生き方への深い共感が得られるような「真の理解者」の意味と思われる。

三　沈約

沈約は、政変の最中、謝朓の宣城赴任に先だって東陽太守へ転出した。数年後には都に戻って中央に仕えるが、永泰元年（四九八）七月に明帝が崩御して東昏侯が即位すると、横暴残忍な政情から逃れるべく天台の桐柏山へ身を避けた。そのときの作に「賞心」の語が見える。

沈約は若いころから道教や仏教に親しみ、東陽には僧の慧約を伴い、道教の聖地金華山に遊んだほか、茅山派の開祖、陶弘景を招こうとしたことも知られている。桐柏山では、道士とともに生活した時期があった[16]。

この詩の冒頭では、秦の始皇帝や漢の武帝が欲に駆られて仙界を求めた愚かさを描き、自足を知って求道に向かう自身の姿を次のように詠う。

沈約「遊沈道士館22」　沈道士の館に遊ぶ
……
11　曰余知止足　曰に余は止足を知り
　　是願不須豊　是れ願いは豊いなるを須めず
13　遇可淹留処　遇可淹留処　淹留すべき処に遇えば

15 便欲息微躬　便ち微躬を息めんと欲す
山嶂遠重疊　山嶂は遠く重疊たり
竹樹近蒙籠　竹樹は近く蒙籠たり
17 開衿濯寒水　衿を開きて寒水に濯ぎ
解帶臨清風　帶を解きて清風に臨む
19 所累非外物　累う所は外物に非ず
為念在玄空　念いを為すは玄空に在り
21 朋来握石髓　朋来たれば石髓を握り
賓至駕輕鴻　賓至れば輕鴻に駕る
23 都令人逕絶　都て人逕をして絶えしめ
唯使雲路通　唯だ雲路をして通ぜしむ
25 一挙陵倒景　一たび挙がりて倒景を陵ぐ
無事適華嵩　華嵩に適くを事とする無し
27 **寄言賞心客**　言を寄す　賞心の客
歲暮爾来同。　歲暮　爾来りて同にせよと。

[李善注]なし
[五臣注]銑曰、賞心客、謂与我賞此之友人。

道観周辺の山水に身を清めて心を解放し、ひたすら玄妙なる道を追い求める。「朋」や「賓」の来訪は歓迎しながら俗世との交渉を絶ち、天空への飛翔を志向して、「賞心の客」に向かって「晩年には君もここに来て共に過ごそう」と誘いかける。

奇しくも、結びの「寄言賞心客」は、謝朓「遊山」と全く同じ表現である。求道の場へと誘う内容も、謝朓が敬亭山で隠遁を選択して道理を伝えたことに呼応し、さらには、謝霊運が隠棲志向や道の共有、本音の交流を求めて「賞心惟良知」「賞心不可忘」「邂逅賞心人」と詠い、「寄言摂生客」と呼びかけた表現と通じる[17]。沈約が招く「賞心の客」が、謝霊運や謝朓と同じ「真の理解者」を表すことは明らかであろう。それは、いま仙界の遊びをともにする「朋」や「賓」よりも特別な存在であり、真の心の交流ができる相手を指している。五臣注は「我と此を賞するの友人を謂う」と説くが、「此」は山水の美しさではなく、仙境に身を置こうとする思い、隠棲を求める生き方ではないだろうか。

四　謝朓と沈約

ところで、謝朓と沈約の詩の結びに「寄言賞心客」という呼びかけが共通するのは、果たして偶然の一致だろうか。西邸時代ともに文学活動を牽引した二人には、政変後も詩の応酬が残り、謝朓は晩年、沈約への深い恩情を「酬徳賦」に綴っている。いま政変後の二人の詩を概観すると、とくに地方転出をめぐって共通の表現が確認でき、深い交流の跡が浮かび上がる。その文脈の中に「寄言賞心客」の句を置くと、あたかも互いを意識した呼びかけのように思われるのである。

（一）共通の表現

沈約は王融のクーデターのあと隆昌元年（四九四）の

春ごろ、尚書吏部郎から寧朔将軍・東陽太守へ転出し[18]、謝朓は翌建元二年（四九五）の夏ごろ、中書郎から宣城太守へ赴任した。

前述のとおり、謝朓は「之宣城出新林浦向版橋27」で都との隔絶を「曇塵自茲隔」と詠い、宣城赴任に官と隱の両立を見て「既懽懷禄情、復協滄洲趣」と詠った。これが謝霊運を踏まえることは先に述べたが、謝朓より前に都を出た沈約も、同じ表現を用いているのである。

・忘帰属蘭杜、**懷禄**寄芳荃（帰るを忘れて蘭杜に属し、禄を懷いて芳荃に寄す）　沈約「早発定山27」

・紛吾**隔曇滓**、寧仮濯衣巾。願以潺湲水、沾君纓上塵（紛として吾　曇滓を隔つ、寧んぞ衣巾を濯うに仮らんや。願わくは潺湲たる水を以て、君が纓上の塵を沾さん）　沈約「新安江水至清浅見底貽京邑遊好27」

ともに東陽赴任途上の作であり、前者は、銭塘湖の西南にある定山で詠んだものである。「香草の蘭や杜若に惹かれて帰るのを忘れ、君子の徳を思わせる芳しい荃に俸禄への思いを託す」とあり、謝朓と同じように、謝霊運の句「久露干禄請、始果遠遊諾」（「富春渚26」）をなぞりながら、隱と官の両得を詠っている。定山は、永嘉に赴く謝霊運が「富春渚」で眺めみた山であった。

後者では、新安江で粉塵にまみれた都との訣別を宣言する。讒言に遭った屈原が自身の美徳を示した言葉「紛として吾　既に此の内美有り」（『楚辞』離騒）や、漁父にかけられた言葉「滄浪の水清まば以て吾が纓を濯うべし、滄浪の水濁れば、以て吾が足を濯うべし」（『楚辞』漁父）を響かせながら、もはや俗塵からは隔たって、身を濯ぐ必要のなくなった己の高潔さを掲げている。「君たちの冠の紐もこの水で清めてあげたい」という都の友「京邑遊好」には、西邸時代の同志、謝朓も含まれただろう。この前には「百丈見遊鱗（百丈　遊鱗を見る）」の句があり、自由に泳ぎ回る魚は、かつて竟陵王が「幼賞悅禽魚（幼賞　禽魚を悅ぶ）」（「行宅詩」）、「託性本禽魚（性を託すは本より禽魚）」（「遊後園」）と詠って愛したものであった。

さらに、前者の「早発定山27」は、若いころから深い山を愛し、晩年の赴任で麗しい山を目にした喜びを「夙齢愛遠壑、晩**涖**見奇山（夙齢より遠壑を愛し、晩涖　奇山を見る）」と詠い起こす。前掲の謝朓「遊山」でも、風光明媚な土地への赴任を「幸**涖**山水都、復値清冬緬」と詠っていた。これらも、謝霊運が永嘉の地を理想郷と見なした句「早**莅**建徳郷、民懐虞芮意（早に建徳郷に莅むに、民は虞・芮の意を懐く）」（「遊嶺門山」）[19]を意識したものと考えられる。

三首に共通する「涖（莅）」は、任務に就くこと、掌ることを表すが、詩の用例は少なく、「早」「晩」「幸」と

いった修飾語を伴って理想の赴任をいうものは前例を見ない。ここにも、沈約が謝霊運の表現を用い、謝朓がそれを取り込んだ形跡が見て取れるのである。

そして、永嘉への途上で生まれた謝朓の絶唱「澄江 静かにして 練の如し」にも、沈約との繋がりが見出せる。山上から遥か都の方角を眺め、美しい夕映えに横たわる長江を描いたこの句は、のちに李白の絶賛を得て謝朓の評価を押し上げた[20]。この「練の如し」という比喩が、東陽時代の沈約、そして政変前の謝朓もしくは王融の詩にも認められるのである。

・花樹雑為錦、月池皎**如練**（花樹 雑わりて錦と為り、月池 皎として練の如し）
謝朓「別王僧孺」（一作王融詩[21]）

・望秋月、秋月光**如練**（秋月を望む、秋月 光は練の如し）
沈約「八詠・登台望秋月」

・餘霞散成綺、澄江静**如練**（余霞 散じて綺と成り、澄江 静かにして練の如し）
謝朓「晩登三山還望京邑27」

「別王僧孺」は、永明十一年（四九三）、晋安郡太守王徳元に随行する王僧孺を送別したもので、月影が漂う滑らかな水面を「練の如し」と描いている。色とりどりの花を「錦」に喩えた上の句との対は美しく、ここから「餘霞散成綺、澄江静如練」という変奏が生み出されたように思われる。自然の景物を「練」に喩えた表現はこれ以前に例がなく、送別の場では、この句の斬新な美しさに、賞賛の声が上がったであろう。ただし、謝朓の本集には収められておらず、王融の作とする説もある。

「八詠」は、沈約が東陽太守のとき、婺江のほとりに建てた玄暢楼で詠んだ連作である。白く冴えわたる月光を「練」に喩える着想は、明らかに「別王僧孺」を襲っている。この詩と、謝朓「晩登三山還望京邑27」との先後関係は定められない。

政変前の「別王僧孺」が、仮に王融の作であったならば、沈約と謝朓は、その直後にクーデターを起こして無残な最期を遂げた王融の表現を、それぞれ都を発ってから用いたことになる。いかなる動機が働いたのか探ってみたい衝動に駆られるが、ここでは、沈約と謝朓が、地方やその途上で美しい景色を目にしたとき、旧友の秀句あるいは自身の旧作に思いを致し、また互いを意識しながら「練の如し」と詠ったことが確認できれば十分であろう。それは二人にとって、往事への追憶と旧友への思いに誘われる表現でもあったのである。

もう一例、謝朓と沈約を繋ぐ表現を挙げておこう。玄暢楼に登って美しい夕映えをめでた沈約は、日没とともに色を失う山水を前に、郷愁を募らせたことがあった。

落暉映長浦、煥景燭中潯。雲生嶺乍黒、日下渓半陰。**信美非吾土**、何事不抽簪（落暉 長浦に映じ、煥景 中潯に燭す。雲生じて嶺は乍ち黒く、日下りて渓は半ば陰なり。信に美なるも吾が土に非ず、何事ぞ簪を抽かざらん）
沈約「登玄暢楼」

謝朓も宣城に出る前、きらびやかな宮中を描きながら、切実な帰隠願望を吐露した。

信美非吾室、中園思偃仰。朋情以鬱陶、春物方駘蕩。安得凌風翰、聊恣山泉賞（信に美なるも吾が室に非ず、中園に偃仰せんことを思う。朋情 以て鬱陶たり、春物 方に駘蕩たり。安んぞ風を凌ぐ翰を得て、聊か山泉の賞を恣にせん）
謝朓「直中書省30」

これらの詩に見える「信美非吾～」は、周知のとおり王粲「登楼賦11」の「雖信美而非吾土兮（信に美なりと雖も吾が土に非ず）」を用いて、そこが自分の居場所ではないことを憂えた表現である。董卓の乱後、劉表のもとで長らく冷遇を受けた王粲の句は、不遇を抱えて異郷にある者の思いを託すものとなり、たとえば西晋の潘岳にも、都から追放された嘆きを載せて「信美非吾土、秖攪懐帰志（信に美なるも吾が土に非ず、秖だ帰るを懐うの志を攪すのみ）」（「在懐県作詩二首26」其二）と詠じた句がある[22]。沈約と謝朓に限ったものではないが、同じ時期、同じ政局不穏を背景として詠われた二人の句には、互いを意識した痕跡を認めてよいのではないか。

（二）詩の応酬と謝朓「酬徳賦」

次に、二人の詩文の応酬を見てみたい。沈約は建武三年（四九六）の春か夏ごろ東陽から都に帰り、輔国将軍・五兵尚書を経て国子祭酒となった。謝朓も同じ年の末に、中書郎として召還された。その後、永泰元年（四九八）には岳父王敬則の謀叛を告発したことにより、尚書吏部郎に抜擢される。二人の詩の応酬は、この時期わずかに数首が残るのみだが[23]、深い交流が見て取れる。

まず、謝朓の「在郡臥病呈沈尚書26」は、宣城の病床から都の沈約に寄せた詩である。土地の特産や旬の食べものを詠み込んで、隠棲のような自由な暮らしぶりを描いたあと、沈約との再会を夢にみて「良辰竟何許、夙昔夢佳期（良辰 竟に何許ぞ、夙昔 佳期を夢みる）」と詠った。沈約は「和謝宣城30」を返して、謝朓と夢に交わったことを「神交疲夢寐、路遠隔思存（神交りて夢寐に疲れ、路遠くして思存隔たる）」と詠い、沈約への思慕を深めている。

また、沈約は、国子祭酒のころ田園を歩き、豊かに実った作物を色鮮やかに描いて、田園に惹かれる思いを「荒渠集野雁、安用昆明池（荒渠に野雁集まる、安んぞ昆明池を用いん）」（「行園」）と詠った。謝朓はその歓びに寄り添って「君有棲心地、伊我歓既同（君に棲心の地有り、

伊れ我 歓びは既に同じ)」(「和沈祭主行園」)と唱和し、「何用甘泉側、玉樹望青葱(何ぞ用いん 甘泉の側に、玉樹 青葱たるを望むを)」と、宮中ではなく田園の素朴な自然に向かう気持ちに共感を寄せている。

前述のとおり、永泰元年(四九八)に明帝が崩御して東昏侯が即位すると、時局を案じた沈約は桐柏山に退いた。謝朓は翌年、側近らの権力闘争に巻き込まれて刑死する。三十六歳の若さであった。

謝朓が沈約に宛てた「酬徳賦」は、死の直前の永泰元年(四九八)あるいは建武四年(四九七)の作とされる[24]。この賦は、西邸で才筆を揮った永明時代から、めまぐるしい政変と地方転出を経てふたたび都に仕官するまでの激動の半生を振り返りながら、沈約との交情と感謝の思いを綴ったものである。本稿が特に注目したいのは、謝朓が沈約を無二の理解者と見なし、ともに隠棲したいと結ぶ部分である。

嗟民生之知用、知莫深於知己。彼知己之為深、信懐之其何已(嗟(ああ)民生の知用は、己を知るより深きは莫きを知る。彼の己を知るの深きを為す、信(まこと)に之を懐うこと其れ何ぞ已まん)

世の推移と自身の境遇に思いを致し、「この世で功を成すには何より己を知ることが重要である。沈約は自分を深いところまで理解してくれる、まことにその思いは尽きることがない」と述べて、沈約が知己であることに深い感慨を催している。このあと、か弱い自分の成長を支え、時には安らぎを与えられたこと、友愛をもって互いを高め合えるような関係を結べたことを喜ぶ内容も見える[25]。沈約の東陽赴任を回想した場面では、自らを謝霊運と謝恵連に重ねて送別の場面を描き[26]、宣城赴任の際に沈約からアドバイスを受けたことも記されている。謝朓にとって沈約は、志をともにし苛酷な体験をも共有した先輩であり、確かな拠りどころであった。

賦の末尾では、沈約が東陽の金華山に仙道を求めたのは、都の脅威や毀誉褒貶から離れて身を守るためだったと述べ、自分も沈約と手を携えて仙界に昇りたい、万物みな一体となる境地に到って世俗の価値観など打ち捨てたいと結ぶのである。

聞夫君之東守、地隠蓄而懐仙……悟寰中之迫脅、欲軽挙而舎旃。離寵辱於毀誉、去夭伐於腥膻。忽携手以上征、躋中皇之修迥……斉天地於倏忽、安事人間之紆婞哉。(夫君の東守たるを聞く、地は隠蓄にして仙を懐く……寰中の迫脅するを悟り、軽挙して旃(これ)を舎(す)てんと欲す。寵辱を毀誉より離れ、夭伐を腥膻より去る。忽ち手を携えて以て上征し、中皇の修迥たるに躋(のぼ)らん……天地を倏忽たるに斉しくし、安んぞ人間の紆婞を事とせんや。)

「寄言賞心者」の句に戻ると、政変が起こって沈約が東陽へ赴任した翌年、宣城に出た謝朓は、敬亭山の神聖な山水に触れて「賞心の客に言寄せる、性にかなう隠棲の道こそ最善だ」(「遊山」)と呼びかけた。都に帰った二人はともに宮中に仕えたが[27]、明帝の崩御によって新たな紛擾が生じたころ、謝朓は、一番の理解者「知己」である沈約との交情に深い感慨を込めて、ともに喧噪を逃れて隠遁したい(「酬徳賦」)と伝え、沈約は身を避けた桐柏山で、仙境のごとき山水に身心の解放を得て「賞心の客に言寄せる、晩年には君もここへ来て共に過ごそう」(「遊沈道士館22」)と誘ったのである。この「賞心の客」への呼びかけは、謝朓と沈約が互いを知己なる存在と意識して交わしたものではなかったか。

無論、憶測の域を出るものではない。士大夫が隠遁志向を詠うのは詩の常套であり[28]、乱世では、ことばの裏に別の思いが潜むこともある。ただ、政変後、地方へ転出する二人の詩にこれほど共通の表現があり、互いを意識した痕跡が見えること、その後の詩の応酬や謝朓の「酬徳賦」から、単なる社交辞令とは見なし難い深い交流がうかがえることは、この推論を支える材料となるだろうか。

五 その他

(一) 西邸周辺——虞羲・任昉・何遜

次に西邸周辺の例を検討する。虞羲、任昉、何遜の例は制作時期が確定できないが、謝朓や沈約の詩とほぼ同時期のものと思われる。

虞羲は、西邸に招かれた人物であり、鍾嶸『詩品』によると、謝朓に詩の才能を認められたという[29]。秋の月を細やかに描いた次の詩は、西邸で競作された詠物詩のようにも思われる。

虞羲「詠秋月」　秋月を詠ず

1　影麗高台端　影は高台の端に麗しく
　光入長門殿　光は長門殿に入る
3　初生似玉鈎　初めて生ずるは玉鈎に似
　裁満如団扇　満を裁ちて団扇の如し
5　泛濫浮陰来　泛濫して 浮陰 来たり
　金波時不見　金波 時として見えず
7　儻遇賞心者　儻(も)し賞心の者に遇わば
　照之西園宴。　之を西園の宴に照らせ。

高台に懸かる姿、宮殿に射し込む光、満ち欠けの形状などを描出し、「もし「賞心の者」に出逢ったら、西園の宴を照らしてほしい」と呼びかける。この「賞心の者」は、「月をめでる者」の意味であろう。月を擬人化した呼びかけであることから、「賞心」は月にとっての知音、月にとっての真の理解者をいう表現ではないだろうか。西邸の詠物詩には自然や器物の人格化が多く見られ、例えば謝朓にも、愛しい君に出会って手折られた梅や敷かれ

る筵を描いた同座の句があり[30]、この月の擬人化とも趣きが似る。

また、「遇」字を用いて「賞心」との出会いを詠い、「賞心」の後に人を表す語を付す表現は、謝霊運を踏まえた謝朓の「賞心於此遇」句（「之宣城出新林浦向版端27」）や「寄言賞心客」句（「遊山」）とも通じている。謝朓が虞羲の詩才を称えたことを思い起こせば、あるいは両者の間に、影響関係を認めることも可能かもしれない。

ただし、虞羲のこの「賞心者」は、月にとっての知音ではなく、「めでる心」をもつ者の意味である可能性も残される。後述するように、「賞心」の語は梁にかけて「めでる心、鑑賞する心」の意味へと変容してゆく。

任昉（四六〇～五〇八）もまた、西邸の「竟陵八友」の一人であり、竟陵王の行状を著す（『文選』巻六〇所収）など散文に優れた。沈約と並んで「任筆沈詩」と称され、沈約が墓誌銘を書いている[31]。次の詩は、招聘されながら官に就かない旧知の高潔さを慕う内容である。

任昉「贈徐徴君」　徐徴君に贈る

1　促生悲永路　　促生 永路を悲しみ
　　早交傷晩別　　早交 晩別を傷む
3　自我隔容徽　　我 容徽を隔てしより
　　於焉徂歳月　　焉に於て歳月徂く
5　情非山河阻　　情は山河の阻むに非ず
　　意似江湖悦　　意は江湖に悦ぶに似たり
7　東皐有儒素　　東皐に儒素有り
　　杳与栄名絶　　杳として栄名と絶つ
9　曾是違**賞心**　　曾ち是れ賞心に違う
　　曷用箴余缺　　曷を用てか余が欠を箴めん
11　眇焉迫平生　　眇焉として平生を迫い
　　塵書廃不閲　　塵書 廃して閲せず
13　信此伊能已　　信に此に伊れ能く已まん
　　懐抱豈暫輟　　懐抱 豈に暫くも輟めんや
15　何以表相思　　何を以てか相思を表さん
　　貞松擅厳節。　　貞松 厳節を擅にす。

冒頭で別れて久しいことを憂え、名利とは無縁の徐君の生き方を真の儒者だと称える。第9・10句で「なんとも[32]「賞心」に違ってしまった、どうやって私の過ちを戒めてもらえようか」と嘆き、はるか往事に思いを馳せて、徐君への思いを操ある松に託す。

「違賞心」とは、具体的に何をいうのか。下の句の「箴余缺」は、過ちを正してくれる知己との永別を嘆く表現として、顔延之が著した陶淵明の誄に「叡音永矣、誰箴余闕、嗚呼哀哉（叡音 永きかな、誰か余が闕を箴めん、嗚呼 哀しき哉）」（「陶徴士誄57」）と見える。任昉はこれに拠った可能性が高く[33]、とすれば、上の句の「違賞心」も、知己たる徐君との別れをいう文脈で理解するのが妥当であろう。

徐君との別離は、第3句に「隔容徽」と記されるが、

それが麗しい外見を描くのに対して、第9句では心が通じ合うような関係性の喪失を示す。「違」字は、物理的な別れだけでなく、思いに背くといった心理的乖離も表す[34]ことから、「違賞心」は、任昉が仕官のために徐君と別れたことを回想した表現と推測される。この「賞心」は、徐君が「真の理解者」、知己であることを表す言葉ではないだろうか[35]。謝霊運や謝朓が「賞心」との出会いを「邂逅」や「遇」の字で表したのと、逆の発想である。

「徐徴君」については、『南斉書』高逸伝に載せる徐伯珍（四一四～四九七）を指すとする説があり[36]、それに従えば沈約「遊沈道士館22」より前の作となる。召されても出仕せず、学問の研鑽に専念する生き方は詩の内容に一致するが、確たる根拠はないようである。

次に、何遜（？四六六～？五一九）は、若いころ范雲や沈約に文才を認められたが、西邸のメンバーではなく、梁の天監年間に奉朝請で起家した。次の詩は、役所の前の竹を眺めて「崔録事」なる人物に答えた詩であり、それが斉の始安王蕭遥光の記室であった崔慰祖（四六五～四九九）であれば、梁より前の作となる[37]。

何遜「望廨前水竹答崔録事」　廨前の水竹を望み、崔録事に答う

1　蕭蕭藂竹映　　蕭蕭として藂竹映え
　　淡淡平湖静　　淡淡として平湖静かなり
3　葉倒漣漪文　　葉は漣漪の文に倒に
　　水漾檀欒影　　水は檀欒の影を漾わす
5　相思不会面　　相い思うも会面せず
　　相望空延頸　　相い望みて空しく頸を延ばす
7　遠天去浮雲　　遠天 浮雲去り
　　長墟斜落景　　長墟 落景斜めなり
9　幽痾与歳積　　幽痾は歳と与に積もり
　　賞心随事屏　　賞心は事に随いて屏けらる
11　郷念一遭回　　郷念 一に遭回し
　　白髪生俄頃。　　白髪 俄頃に生ず。

湖畔の竹を眺めながら崔君を思い、雲の消えた空、夕映えの村落へと視線を投じて、第9・10句で「病は年々積み重なり、「賞心」は何かにつけて隔てられる」と嘆く。この「賞心」は、景色や風情をめでる心もち、楽しみを表すものではないだろうか。美しい山水を前にして、隔たり覆われる（「屏」）と嘆くことから（内面における減退や消失を嘆くものではない）、この「賞心」は、仲間とともにする賞翫のニュアンスを帯びるだろう。この詩の背後には、崔君の不在を憂え、君とともにこのすばらしい景色を眺めたいという思いも読み取れる。何遜にはもう一首、「崔録事」に宛てた詩「与崔録事別兼叙携手」があり、そこでも、病や仕事のためにともに楽しめないことを憂え、美しい秋の再会を心待ちにしている[38]。ただし、この「賞心」は、「真の理解者」の意味であり、崔録事のような知己そのものを指す可能性も否定できない。

（二）梁簡文帝以降

さらに時代が下ると、簡文帝の二首と陳代の二首に「賞心」の語が見える。すべてが謝霊運「擬魏太子鄴中集詩八首並序30」の有名な一節「天下良辰美景、賞心楽事、四者難幷。今昆弟友朋、二三諸彦、共尽之矣（天下の良辰・美景、賞心・楽事、四者 幷せ難し。今 昆弟友朋、二三の諸彦、共に之を尽くす）」を襲用し、宴遊における賞翫や楽しみの意味で用いられているようである。

梁簡文帝蕭綱「晩日後堂詩」
5　花留蛺蝶粉　花は留む 蛺蝶の粉
竹翳蜻蜓珠　竹は翳う 蜻蜓の珠
7　賞心無与共　賞心 与に共にする無く
染翰独踟躕　翰を染めて独り踟躕す

梁簡文帝蕭綱「九日賦韻詩」
5　遠燭承歌黛　遠燭 歌黛を承け
斜橋聞履声　斜橋 履声を聞く
7　梁塵下未息　梁塵下りて未だ息まず
共愛賞心幷。　共に賞心の幷さるを愛す。

顧野王「餞友之綏安詩」　友の綏安に之くを餞す
5　悟彼芳歳新　彼の芳歳の新たなるを悟り
愜此賞心会　此に賞心の会するに愜う
7　絲竹邯鄲倡　絲竹 邯鄲の倡
朋游鄴中蓋　朋游 鄴中の蓋

釈洪偃「登呉昇平亭」　呉の昇平亭に登る
9　独遊乏徒侶　独り遊びて 徒侶乏く
徐歩寡逢迎　徐ろに歩きて 逢迎寡なし
11　信矣非吾託　信なるかな 吾が託するに非ず
賞心何易幷。　賞心 何ぞ幷せ易き。

簡文帝の二首は、庭園の春景をともにめでる者がいない寂しさ、重陽の宴を仲間とともに楽しむ喜びを詠い、残りの二首も宴遊を仲間と共にする喜びと、共にできない嘆きを詠っている。「共」「幷」「会」といった動詞を用いる措辞も謝霊運を襲うが、謝霊運の「賞心」が「晤言の適（語らいの喜び）」をもたらす集いの一要素であり[39]、四つの要素が揃うことを「幷」、その喜びをともに謳歌することを「共」の字で表すのに対し、これらの「共」「幷」「会」は「賞心」のみを対象とし、他者との「賞心」の共有を言う。「賞心」の意味も、謝霊運のそれが山水とは関係なく、ともに語らう同志や知己の象徴であったのに対し、ここでは、美しい景色や宴を賞翫し楽しむ心の意味で用いられている。謝霊運の表現を踏まえつつも特筆すべき独創性はなく、仲間との場の共有、娯しみの分かち合いを表すものとして、定型化、常套化しているように見受けられる[40]。

また、文章では、天監十二～十七年（五一三～五一八）の成立とされる鍾嶸『詩品』の中に、「文学を解する心、めでる心」の意味で「賞心」の語が確認できる。

欣泰・子真、並希古勝文、鄙薄俗製。賞心流亮、不失雅宗。（欣泰・子真は、並びに古を希いて文に勝り、俗製を鄙しみ薄んず。賞心は流亮にして、雅宗を失わず。）
『詩品』巻下

斉の張欣泰と范縝について、古の風格を追求する態度を評価した箇所であり、「詩の趣きを理解しめでる心」すなわち鑑賞眼が清く冴えわたることを言うものであろう。

六　「賞心」の変容とその背景

以上、「賞心」の語の受容の様相を辿ってきた。謝朓と沈約は、謝霊運と同じ「真の理解者」の意味で、おそらくは互いの存在を意識しながら「賞心」の語を用いた。謝霊運と同じように、政変後の地方転出という境遇に置かれたとき、二人は、謝霊運の人生に自分自身を重ねながらその作品をなぞり、ことばを取り込んだようである。二人と同じく、西邸の文壇に出入りしていた任昉やおそらくは虞羲も、己の本質を理解する者の意味で「賞心」の語を用いた可能性が大きい。

一方、沈約や謝朓らとは距離があったとされる江淹[41]は、殷仲文および謝霊運の詩風を模擬した「雑体詩」の中で、独自の用法を展開した。謝霊運とは違えて「心に賞するもの」「（山水を）賞する心」の意味で用いたが、そこには、謝霊運の造語をパッチワークやモザイクのように嵌め込むことによって、謝霊運らしさ、つまり山水描写の興趣を演出しようとする創意が見て取れた。

西邸とは関わりのない何遜の例は、おそらくは美しい景色や風情をめでる心もち、つまり「めでる心」を表しており、友の不在の中で楽しみが減ったことを憂えた表現のように思われた。さらに下って簡文帝や陳代の作になると、宴遊を共にする仲間がいるかいないかを言うものとして、「めでる心」「賞翫する心」を表す用法が定着していた。かつて謝霊運は、建安文壇を模した作品の序文で、理想の集いに不可欠な要素を「良辰、美景、賞心、楽事」と記したが、簡文帝などは、この「賞心」も、賞翫の楽しみを象徴するような、「楽事」に近い表現と捉えて取り込んだように思われる。また、鍾嶸『詩品』には、「文学の価値を解する心」を表す例も見受けられた。

このように、「賞心」の語は、斉から梁にかけて「めでる心」を表す例が現れる。この背景には、「賞」一字の意味の変容および表現の拡大が関わるものと考えられる。

六朝における「賞」の用法については、すぐれた先行研究の蓄積があり、つとに小尾郊一氏が、謝霊運のころから梁代にかけて自然を眺め楽しむ意味の用例が増えること、それは自然美を愛好し鑑賞する態度が発達した結果であることを論じている[42]。また、佐竹保子氏は、一

連の論考において「賞」の原義――甲から乙へ価値あるなにものかが与えられ、乙から甲へその価値にぴったりと合致する別のなにかを返す――を究明し、その中身が目に見える「物」から理解や感動へと変化することや、六朝後半期の詩文には「賞」の原義が希薄化して、軽い意味での「たのしみ」「たのしむ」を表す例が現れることを指摘する[43]。筆者は改めて、謝霊運の「賞」を軸にその後の詩の用法を辿ったところ、とりわけ西邸文壇から集いの描写に「賞」字が使われるようになり、社交性と娯楽性を増すことが確認できた。詳細は別稿に譲るが、以下、簡単に要点をまとめておきたい。

「賞」は謝霊運において、永嘉左遷を機に対象を人間から山水へと拡大する。それは、今言うような鑑賞や賞翫の意味ではなく、山水の中に真理を発見し道を体得するといった、特別な体験を表すものであった。謝霊運以降、山水を対象とした用法は継承されるが、次第に超俗的、宗教的な色合いが薄れ、遊戯性を帯びて賞翫全般を表すものとなる。質量ともに西邸の文壇が及ぼした作用は大きく、竟陵王は西邸の集いを「賞会」と呼び、王融は「人外賞」「結賞」「神賞」と詠って「賞」の字の定着と熟語化を促した[44]。これらの例には、世俗と隔絶した境地をめでるニュアンスが含まれるが、やがて謝朓は荊州、宣城への外任を機に、宴遊の場での歓びや楽しみを表すのに「賞」の字を多用し、一気に表現のバリエーションを広げた。「遊」字と並んだ「遊賞」、酒を表す語と直に結びついた「清樽賞」、時や数量、時間幅を表す語と結びついた「旧賞」「一賞」「賞方融（賞 方に融し）」など、遊びの様相を具体的に示す表現が見受けられる[45]。西邸では他にも個別の花をめでる「賞」の例が散見し、梁代には、「賞」が、喜びを表す「歓」や「悦」の字と対になる例も出現する[46]。つまり、「賞」が謝霊運の宗教的な体験から、社交的・娯楽的な賞翫の意味へと変容して定着し、多様な熟語化が進んで表現の幅を拡大する流れ[47]と軌を一にして、「賞心」の語も「めでる心、賞翫する心」を表す例が現れるのである。

おわりに

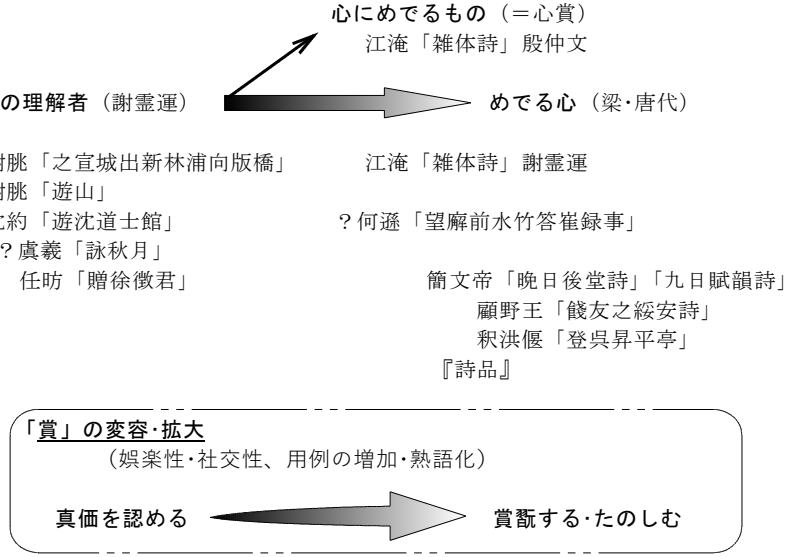
本稿では、謝霊運が創出した「賞心」の語が、斉から梁にかけて、受容の過程で「真の理解者」から「めでる心」の意味へと変容すること、その背景に「賞」一字の用法の変化が関係することを指摘した。

『文選』において「賞心」の語は、謝霊運の六首と、本稿で取り上げた江淹「雑体詩31」、謝朓「之宣城出新林浦向版橋27」、沈約「遊沈道士館22」に見える。今なおこれらの解釈に揺れがあるのは[48]、「賞心」の語がもともと多義性を孕むことに加え、『文選』の中に謝霊運と受容後の作品が混在し、受容の様相も江淹と謝朓・沈約とで異なること、梁にかけて意味の変容が生じ、唐代へ継承されたことに拠るのではないか。

謝霊運を模した江淹「雑体詩」が、『文選』に収録されたことも影響するだろう。江淹は「賞心」を「めでる心」の意味に塗り替えて、謝霊運の山水詩の世界に嵌め込んだ。『文選』の中のことばは、解釈の上で相互に参照されるものであり、「雑体詩」によって、謝霊運のもとの「賞心」の解釈も「めでる心」の方向へ引っ張られた可能性が想定される。さらに想像を逞しくすれば、謝霊運の「相逢行」が『文選』に採られなかったことも挙げられよう。この詩は、謝霊運が「賞心」の語を用いた詩のうち唯一『文選』に採られなかったもので、乱世で本音が曝け出せる知己との出会いを求めて「邂逅賞心人、与我傾懐抱（賞心の人に邂逅し、我と懐抱を傾く）」と詠う。そこに山水は登場せず、「山水をめでる心」といった解釈は導き得ない[49]。この詩が『文選』に入っていれば、謝霊運の「賞心」は、あるいは「真の理解者」という解釈が主となった可能性も考えられる。

『文選』は、諸家の注が施され、規範を形成しながら唐以降の文学に取り込まれてゆく。『文選』のことばを見つめることは、その後の創作を考える上で欠かせない。一方、時には『文選』の外に目を向けてみることも、有用であるように思われる。謝朓「遊山」の「賞心の客」への呼びかけから、沈約との深い関係が炙り出されるように、謝霊運「相逢行」の「邂逅賞心人」の句から、知己との出会いを求める思いが浮かび上がるように、また違った景色が見えるかもしれない。

〈「賞心」の変容〉



〈政変後の地方転出をめぐって謝朓と沈約に共通する表現〉

	謝朓	沈約	典拠
官と隱の両立	既懽懷禄情、復協滄洲趣 「之宣城出新林浦向版橋27」	忘帰属蘭杜、懷禄寄芳荃 「早発定山27」	久露干禄請、始果遠遊諾 謝霊運「富春渚26」
都との隔絶	囂塵自茲隔、賞心於此遇 「之宣城出新林浦向版橋27」	紛吾隔囂滓、寧假濯衣巾 「新安江水至清浅見底貽京邑遊好27」	
理想の赴任	幸涖山水都、復値清冬緬 「遊山」	夙齢愛遠壑、晩莅見奇山 「早発定山27」	早蒞建徳郷、民懐虞芮意 謝霊運「遊嶺門山」
「練」の比喩	餘霞散成綺、澄江静如練 「晩登三山還望京邑27」	望秋月、秋月光如練 「八詠・登台望秋月」	花樹雑為錦、月池皎如練 謝朓「別王僧孺」(一作王融詩)
現状への違和感	信美非吾室、中園思偃仰 「直中書省30」	信美非吾土、何事不抽簪 「登玄暢楼詩」	雖信美而非吾土兮 王粲「登楼賦11」
「賞心の客」への呼びかけ	寄言賞心客、得性良為善 「遊山」	寄言賞心客、歳暮爾来同 「遊沈道士館22」	寄言摂生客、試用此道推 謝霊運「石壁精舎還湖中作22」

注

[1]拙稿「謝霊運の「賞心」と「賞」」(『中国中世文学研究』七三　二〇二〇)。

[2]上海古籍出版社　二〇一七。模擬対象である直近詩人の没年および『詩品』など周辺文献の記述を検証して定める。

[3]高橋和巳「江淹の文学」(『高橋和巳作品集』九　河出書房新社　一九七二)。

[4]森博行「江淹「雑体詩」三十首について」(『中国文学報』二七　一九七七)、稀代麻也子「江淹「雑体詩」の陶淵明」(『筑波中国文化論叢』二八　二〇〇九)、川合康三「「自適」の生成—陶淵明・江淹・白居易」(『林田愼之助博士傘寿記念『三国志』論集』二〇一二)など。

[5]沈約「宋書謝霊運伝論」(『文選』巻五〇)に「仲文始革孫許之風、叔源大変太元之気」とある。

[6]本稿では、『文選』所収の詩文は『文選』(胡刻本、ただし五臣注は陳八郎本)に拠り、便宜上、詩題の下にアラビア数字で巻数を記した。それ以外は、下記あるいは逯欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』(中華書局　一九八三)に拠り、その他のテキストに拠る場合は出典を記した。顧紹柏『謝霊運集校注』(里仁書局　二〇〇四)、曹融南『謝朓集校注』(中華書局　二〇一九)、陳慶元『沈約集校箋』(浙江古籍出版社　一九九五)、李伯斉『何遜集校注(修訂本)』(中華書局　二〇一〇)。

[7]「心賞」の例は、鮑照「白頭吟28」に「心賞猶難恃」、謝霊運「石室山」に「如与心賞交」、謝朓「京路夜発27」に「懐人去心賞」など。本稿は、「心賞」と「賞心」は本来同義ではないと考える。

[8]「平明登雲峰、杳与廬霍絶。碧鄣長周流、金潭恒澄澈。桐林帯晨霞、石壁映初晰。乳竇既滴瀝、丹井復寥泬。嵒崿転奇秀、岑崟還相蔽。赤玉隠瑶渓、雲錦被沙汭。夜聞猩猩啼、朝見鼯鼠逝。南中気候暖、朱華凌白雪。幸遊建徳郷、観奇経禹穴」。

[9]「石壁精舎還湖中作22」に「寄言摂生客」、「登石門最高頂22」に「処順故安排」、「石門新営所住四面高山迴渓石瀬脩竹茂林30」に「冀与智者論」。

[10]謝朓の山水描写や謝霊運との関連については、興膳宏「謝朓詩の抒情」(『乱世を生きる詩人たち—六朝詩人論』第四章　研文出版　二〇〇九。初出は一九七〇)、佐藤正光「宣城時代の謝朓」(『南朝の門閥貴族と文学』第七章　汲古書院　一九九七。初出は一九八九)に詳論がある。いずれも、謝朓の「賞心」の語は、謝霊運の山水観を象徴したものとる。

[11]同様の表現は、その後の「含情尚労愛、如何離賞心」(「晩出西射堂22」)、「永絶賞心望、長懐莫与同」(「酬従弟恵連25」)にも見える。

[12]玄豹の話は『列女伝』賢明伝・陶答子妻に見える。また、洪順隆「謝朓の作品に現われた「危懼感」」(『日本中国学会報』二六　一九七四)は、謝朓の隠遁思想が、保全を図ろうとする「危懼感」を伴うことを論じ、最も顕著な例として「之宣城出新林浦向版橋」詩を挙げる。

[13]「遊山」「賽敬亭山廟喜雨」「祀敬亭山廟」「敬亭山詩」「祀

敬亭山春雨」「往敬亭路中」（最後の二首は幕僚との聯句）。

[14]謝霊運「初去郡26」に「畢娶類尚子、薄遊似邴生」。「勝迹」は、もとは『韓非子』喩老の「戦勝、故肥也」に基づく。

[15]石碩『謝朓詩の研究―その受容と展開』第七章（研文出版 二〇一九。初出は二〇一八）。

[16]沈約「桐柏山金庭館碑」（『芸文類聚』巻七八）に「置道士十人、用祈嘉祉。約以不才首膺斯任、永棄人群、竄景窮麓」。なお、宋・施宿『嘉泰 会稽志』巻二〇、高似孫『嘉定 剡録』巻六上は「遊沈道士館」の詩題を「遊沈道士金庭館」に作る。

[17]前掲「遊南亭22」、「田南樹園激流植援30」、「相逢行」第一章、「石壁精舎還湖中作22」。

[18]沈約の東陽赴任の時期および在任期間については諸説あるが、本稿では今場正美「東陽太守時代の沈約」（『隠逸と文学』第二篇第一章第三節 朋友書店 二〇〇三。初出は二〇〇一）に拠った。

[19]「建徳郷」は『荘子』山木篇に「南越有邑焉、名為建徳之国。其民愚而朴、少私而寡欲」と記される理想の国。「虞」「芮」は周の文王の時代、譲り合いの精神で領土問題を解決した国の名（『史記』周本紀）。ちなみに、江淹「雑体詩」の謝霊運の詩には「幸遊建徳郷」とあり、謝朓の「幸泣山水都」を謝霊運の「早蒞建徳郷」句に織り交ぜていることが分かる。

[20]石碩氏前掲注[15]著書、第三章「「李白と謝朓」再考―「澄江浄如練」句の受容と展開」（初出は二〇一六）に詳しい。

[21]『芸文類聚』巻二九人部・別上は謝朓「別王僧孺」、『古文苑』巻九は王融「別王丞僧孺」。『古詩紀』は王融（巻六七）と謝朓（巻六九）の両方に「別王丞僧孺」の題で収める。

[22]このほか曹植「雑詩二首29」其二に「呉会非我郷、安能久留滞」、鮑照「夢帰郷」に「此土非吾土、慷慨当告誰」など。

[23]謝朓「酬徳賦」は、宣城太守と東南海太守に出る際にも沈約から詩を贈られたことを記すが、残らない。

[24]制作時期および内容については、佐藤正光「謝朓の「酬徳賦」について」（『松岡榮志教授還暦記念 中国学芸聚華』白帝社 二〇一二）、同「謝朓の生涯における岐路と政局―「酬徳賦」を中心として」（『六朝学術学会報』二〇 二〇一九）が詳細に論じている。

[25]「牽弱葛之蔓延、寄陵風於松杞。指曲蓬之直達、固有憑於原泉。彼排虚与蹠実、又相鳴於林沚。興伐木於友生、詠承筐於君子。矧景行之在斯、方寄言於同恥。求相仁於積習、寓神心於名理」。

[26]「我艤舟以命徒、将洎徂於南夏。既勖予以炯戒、又引之以風雅」。佐藤正光「謝朓の「酬徳賦」について」（前掲注[24]）に指摘がある。

[27]『南斉書』崔慰祖伝には、この時期、沈約と謝朓がともに宮中に集ったことが「国子祭酒沈約・吏部郎謝朓嘗於吏部省中賓友俱集、各問慰祖地理中所不悉十餘事」と記される。

[28]実際、謝朓は一年あまりで宣城から都へ戻っている。佐藤正光「宣城時代の謝朓」（前掲注[10]）は、宣城期の強い退隠志向について、謝霊運を意識した虚構の要素を指摘する。

[29]『詩品』巻下に「梁常侍虞羲・梁建陽令江洪子陽、詩奇句清拔、謝朓常嗟頌之」とある。虞羲の生没年は不詳。『南史』

王僧孺附伝の記事「卒於晋安王侍郎」に従うと、「詠秋月」の詩は謝朓の「賞心」の句に先んじるが、『文選』李善注（巻二一虞羲「詠霍将軍北伐」）が引く「虞羲集序」には「天監中卒」とある。

[30]謝朓「詠落梅」に「逢君後園讌、相随巧笑帰」、「同詠坐上所見一物・席」に「遇君時採擷、玉座奉金巵」。

[31]『南史』任昉伝に「既以文才見知、時人云「任筆沈詩」」など。沈約「太常卿任昉墓銘」（漢魏六朝百三家集「梁沈約集」）は「天才俊逸、文雅弘備。心為学府、辞同錦肆。含華振藻、鬱焉高致」と任昉の才能を称える。

[32]「曾是」は語調を強める表現。『詩経』大雅・蕩に「曾是在位、曾是在服」、謝霊運「還旧園作見顔范二中25」に「曾是反昔園」など。

[33]「箴闕」の語は、『春秋左氏伝』襄公四年に臣下が王を戒める意味で「命百官、官箴王闕」と見えるが、「箴余闕」は他に類例を見出せない。

[34]『文選』に例を求めれば、謝霊運「過始寧墅26」の「違志似如昨、二紀及茲年」は官界に入ったこと、傅咸「贈何劭王済25」の「槁葉待風飄、逝将与君違」は都から去って地方に行くことを表す。

[35]「賞心」を「快意、快心願」（馮保善注訳『新訳古詩源』下三民書局 二〇〇六）、「譲心情歓暢的隠逸之志」（周明校注『古詩源校注』下 商務印書館 二〇二一）と訳すものもあるが、下の句との繋がりが弱く文脈上の飛躍があるように思われる。また、「自然の幽趣をめでる心に背く」（星川清孝『古詩源』下 集英社 一九六五）とする解釈も、この詩に山水に関する叙述が見られないことから、やはり唐突の感がある。

[36]張金平『南朝学者 任昉研究』第四章第一節「贈答詩」（中国社会科学出版社 二〇一五）。

[37]李伯斉『何遜集校注』（中華書局 二〇一〇）は崔慰祖とし、建武二年～永元元年（四九五～四九九）に繋ける。なお、この詩を顧則心の作とするものもあるが（『古詩紀』巻七二・斉七引『選詩拾遺』）、校注は何遜集の各本がこの詩を収録することから退ける。

[38]「道術既為務、懽悰苦未幷」「及爾沈痾愈、値茲秋序明……逝将窮履歴、方欲恣逢迎」。

[39]君臣の集いにおける君主側の問題点を挙げて、「豈獲晤言之適」と述べる。詳細は拙稿（注[1]）で論じた。

[40]このほか、梁・張纘「与陸雲公叔襄兄晏子書」（『梁書』陸雲公伝）にも「朝遊夕宴、一載于斯。翫古披文、終晨訖暮。平生知旧、零落稍尽、老夫記意、其数幾何。至若此生、寧可多過。賞心楽事、所寄伊人」と同様の表現がある。

[41]大屋根文次郎「永明文学の流派とその人々」（『世説新語と六朝文学』早稲田大学出版社 一九八三。初出は一九五二）は、謝朓・沈約・王融ら新詩派に対して江淹を旧詩派に分類し、その特徴として声律詩病を追究しないことや、諷諭、模擬、十句詩の多作などを指摘する。なお網祐次『中国中世文学研究―南斉・永明時代を中心として』上篇第一章四「南斉の世相」（新樹社 一九六〇）は、梁・蕭繹『金楼子』説蕃が、西

[48]林田愼之助『六朝の文学覚書』第八章「謝霊運の「賞心」について」（創文社　二〇一〇）は、『文選』所収の謝霊運の例を考察し、すべて「自分の心を識ってくれる人」の意味に解すべきだと論じる。富永一登「『文選』に見られる「賞心」」（『国語国文論集』五〇　二〇二〇）は、『文選』の注釈と従来の解釈を検討し、謝霊運詩の「賞」字に付された李善注の釈義を手掛かりとして、『文選』における「賞心」はすべて「山水を愛でる心」の意であろうと論じる。本稿では『文選』の諸注には考察が及ばなかったため、今後の課題としたい。

[49]前稿（注[1]）で述べたが、この詩はおそらく党錮の禁を逃れた張升が、帰郷の途上で友に出くわして語り合った話が意識されている。詩の冒頭に「行行即長道、道長息班草」、『後漢書』隠逸伝・陳留老父に「去官郷里、道逢友人、共班草而言」。

【附記】本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「『文選』の規範化に関する基礎的研究」（研究課題番号：19H01237）および龍谷大学二〇二一年度国内研究員による研究成果の一部である。

邸の士林に江淹の名を挙げるのに対し、正史には記載がないことを指摘し、その理由を寒門出身によるものかと述べる。

[42]小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』第二章第六節「自然美鑑賞」（岩波書店　一九六二）。

[43]「中国古典における「賞」（上）」（『新しい漢字漢文教育』四四　二〇〇七）、「中国古典における「賞」（下）」（『新しい漢字漢文教育』四五　二〇〇七）、『世説新語』の「賞」」（『六朝学術学会報』一〇　二〇〇九）など。

[44]竟陵王蕭子良「遊後園」、王融「棲玄寺聴講畢遊邸園七韻、応司徒教詩」、同「遊仙詩五首」其二、同「奉和月下詩」。

[45]順に「奉和随王殿下詩十六首」其七、「与江水曹至干浜戯」、「和劉中書絵入琵琶峽望積布磯詩」、「落日同何儀曹煦」、「奉和随王殿下詩十六首」其十五。

[46]任昉「詠池辺桃詩」に「聊逢賞、者愛、棲趾傍蓮池」、蕭琛「別蕭諮議、前夜以酔乖例今昼由酲、敬応教詩」に「俟我式微歳、共賞、階前蘭」。徐君蒨「共内人夜坐守歳詩」に「歓多情未極、賞至莫停杯」、荀済「贈陰梁州詩」に「詩酒悦風雲、琴歌賞、桃李」。

[47]西邸に先駆けて、劉義慶『世説新語』にも娯楽性を帯びた「賞翫」の語が一例見える（任誕篇に孫統の放逸ぶりを「毎至一処、賞翫累日」と記す）。『世説新語』には、「賞」の熟語が豊富に認められるが、これ以外は人物の評価に関するものであり、山水については「戯」「遊」「会心」「有勝情」などと記されて「賞」の字は用いられない。『世説新語』の「賞」については、佐竹保子氏に詳論がある（前掲注[43]）。